

金田地区の産業 養蚕業（４） 変遷

（2024. 3）

金田地区の養蚕業の変遷をたどります。

養蚕業の変遷について、編年的に記された資料は見当たりません。金田地区の養蚕に関して入手しうる諸資料を選択的に記述し、地区の養蚕史を読み取ります。

（１） 1837（天保10）年 寺田縄村操吾と吉沢中村亀屋の間で交わされた、「覚え」の古文書。この時点で、寺田縄村で養蚕が行われていました。

（２） 1864（元政治元）年 領主から入野村へ「桑植え付け禁止の申し渡し」書。養蚕業は、入野村以外の金田地区で広範囲に行われていたと云えます。

＜金田地区の養蚕業（2，3）参照＞

（３） 明治3年（1870）に出された、「相模国大住郡入野村明細帳」には、入野村について地理、産業（農業）等詳細な村落状況が記されています。養蚕については「一、養蚕なし 当時桑苗植付中」とだけ記されています。

＜平塚市（1983）市史3 資料編 近世2＞

「養蚕なし」の表現は、明治の初年、入野地域では養蚕農家が皆無を意味するのでしょうか。それとも、多くの農家で営まれるほどでなかったとの意味でしょうか。

また、「当時桑苗植付中」との記載は、既に記した「古文書」から、入野地域で養蚕が実施されていたことを考えると、桑苗を管理する農業が実施されていたと思われます。桑苗の栽培が小規模だったのでしょうか。何れにせよ、古文書の評価など、この時代に入野地域で養蚕が営まれていたと考えられます。

（４） 明治13年（1880）には「偵察録」が出されています。軍の参謀本部測量課の手になる資料で「民状調査報告として詳しく、町村の実情を知る上に好資料である」と評価されています。＜市史編纂担当＞

ここには、金田地区の村々 総戸数は179戸、総人口1078名とあります。産業について養蚕の記録はありません。10年前の入野村明細帳に「養蚕はなくとも、当時、桑苗を植え付け中」と記されていましたが・・・。

（５） 平塚市郷土史事典には、『平塚の養蚕が急速に広がったのは、明治20年（1887）民権家として知られる宮田寅治が、長野県小県郡から養蚕業の先覚者倉津金次郎を招いて金目を中心に奨励したことによる。以来、有利な副業として栄えた』とあり、日本の第一次産業革命とも呼ばれる繊維産業を支える原料の供給地として平塚、そして

金田地区でも生産を増やして行きました。明治20年に東海道線の平塚駅が誕生し、平塚からの鉄道輸送が可能となり、農業生産にも多くの変化がもたらされてきました。

平塚の養蚕業は、明治20年以来と読めますが、紹介した古文書等から、既に、養蚕業は実施されていました。

(6) 明治44年(1911)の「金田村誌」には『繭・生産量・83石8斗・大半売出』、『近年寺田縄及入野、長持に於ては耕地整理を施行し乾田二毛作を為す等普通作物、園芸に熱心に従事せり養蚕業亦盛に行はれ鶏豚等の畜産の収益も少からず・・・』と記され、金田地区での養蚕業が盛んであったことが分かります。

『繭・生産量・83石8斗・大半売出』、とあります。農家では蚕の飼育から繭が生産され、仲買の業者に売られていました。

(7) 大正12年(1923)の関東地震は、震源地が近く、金田地区も多大な被害を受けました。神奈川県災害誌には、金田地区の養蚕の壊滅的な状況が次のように記されています。

- ・ 桑園の被害 なし
- ・ 蚕室の被害

養蚕戸数	倒潰戸数	半潰戸数	焼失戸数	損害見積価格
92	70	22	—	37,200円

桑畑には被害が確認されていませんでした。地面に根を張った桑の木が地震動を減退させたのでしょうか。竹林は地震に強いともいわれています。

養蚕を営んでいた農家が92戸、そのうち倒潰が70戸、半潰れが22戸ありました。関東地震は、金田地区の養蚕農家のすべてに、深刻な影響を及ぼしていました。当時の家屋は、茅葺屋根で養蚕には室温25度程度の温度が必要です。9月の地震だったためか、暖房用の火力は使われていなかったようです。

(8) 昭和11年(1936)の中郡金田村経済更生基本調査書には、『養蚕販売価額18069円』とあり、震災後の立ち直りを見ることができます。

当時の金田村の総戸数は、202戸、総人口は、1261名 その内農家戸数は、165戸(含・兼業)で、養蚕を営んでいた農家は、101戸ありました。農家以外を含めると、金田地区の半数の家々で養蚕が行われていました。金田地区養蚕業の最盛期を感じさせます。

(9) 横浜貿易新報の昭和16年10月21日記事に『主要食糧増産へ 桑園整理割り当て』の見出しで『県蚕糸課では廿日主要食糧増産確保の対処する桑園整理、口畦抜株及び交互伐採の都市別割当を次の通り決定した・・・△ 平塚 8反 △ 中郡 3

〇六町・・・』と報道しています。

(10) 世界大恐慌、昭和恐慌、戦時体制への進行等の政治・経済の大きな変動を受け、輸出が不振となり養蚕業は大打撃を受けました。国の桑園整理行政は、昭和7年に整理を実施すれば補助金を支払う。

昭和10年に県は『桑園の緑肥作物または食用作物への転作を強く求めた』

＜神奈川県史 通史編 近代現代＞

このような国・県の施策により『桑園は急速に減少していった』＜神奈川県史＞

この推移を神奈川県中郡勢誌には、金田村について、『昭和14年と24年の比較表』が記され当時の養蚕業のありようが知れます。

	養蚕戸数	桑園反別	収繭高・貫
昭和14年	99	210	4354
24年	3	9	9

(9) 昭和26年(1951) 金田村勢要覧には、養蚕戸数、収繭額の記録はありませんが、農機具普及表に『繭毛羽取キ・手回用・3』とのみ記され、養蚕業の衰退を知ることができます。

当時の総戸数 293戸、総人口 1787名 (内：農家戸数 214戸)
大戦後、金田地区の養蚕業は幕を閉じました。

＜ 総 括 ＞

平塚の養蚕業の推移について、平塚市史と中地方事務所の記述を紹介いたします。

① 蚕とタバコ栽培は、明治以降国策として富国強兵政策とそれに伴う産業革命の進展といった、大きな国家の流れと無関係ではない。特に養蚕については県内の各地で同じ時代に盛んに行われ、農家の現金収入の手段としては最も重要なものの一つであった。・・・

平塚では明治20年の東海道平塚駅の開設により貨車による迅速で大量の輸送が容易になり東京、横浜といった市場と直結したのである。流通が生産のあり方を規制した例といえる。・・・

平塚周辺で養蚕が始まったのは、明治中ごろからだった。＜明治29年(1896)豊田本郷に富田製糸場が創業された。＞その後ますます盛況となり、大正末から昭和初期にピークを迎えるが、昭和初期の金融恐慌、世界恐慌によって一気に繭値が暴落し、今度は衰退の一途をたどり、さらに戦中、戦後の食糧難で桑畑が普通畑に替えられて殆んど行われなくなった。・・・

蚕は五月ごろ母屋の座敷で掃立て（座敷に切つてある炉で埋薪を焚いたり、炭や練炭の火をおこして暖めた）を行った。温度調節が大変だったし、雨が降って寒い日が続くと蚕が病気にかかりやすかった。蚕の世話は主に女の仕事で、毎日桑を与え、コジリカキをした。桑は朝、昼、晩、ヤクセ（夜食）と四回与えた。・・・

養蚕は農家にとってまとまった現金収入源であり、忙しいながらも良い繭を多く作って出荷するのが楽しみだった。 <平塚市（1993）「平塚市史12 別編 民俗」>

- ② 過去に於ける本郡の蚕糸業関係機関としては、明治35年創立の中郡農業学校（現在の平塚農業高等学校）に於て養蚕に関する教育をなし、越えて同43年平塚町に県立桑苗養成所が設置せられ、桑苗の無償配布を行い大正6年まで継続された。

また大正4年吾妻村に蚕業取締所二宮支所が設置され、蚕種の検査・蚕病の予防・蚕業の指導等を行い、昭和18年廃止されるまで当地方の蚕糸業の発展に寄与した。

大正6年平塚町に蚕種冷蔵庫株式会社が創立され、大正12年の関東大震災のため破損するまで 蚕種保護に当たり、殊に夏秋蚕の発達に貢献した。

<中地方事務所（1953）「神奈川県中郡勢誌」>